

意見陳述書

平成21年9月4日

野 口 政 造

1 樋島では水俣まで魚を捕りに行った

私は野口政造と申します。昭和5年生まれで、いま79歳です。天草の^{ひのしま}樋島から参りました。

樋島は小さな島です。海からすぐ急斜面で山です。平地がほとんどありません。川也没有。農業には不向きです。小さな畑で唐イモを作る程度です。

樋島の主要産業は漁業です。ほとんどの家が船を持ち、家族で漁をしてきました。アジ、エビ、チヌ、コノシロ、カレイ、グチ、タイなどを捕りました。売れる魚は水俣や八代の市場におろして、残った魚を毎日食べていました。当時は肉を食べるのは年に1回くらいでした。水俣沖は魚がとて多かったので、樋島の漁師はみな水俣沖まで漁に行っていましたし、他の地域の漁師も集まってきました。不知火海の漁師は、水俣の漁師と同じ魚を食べていたようなものです。

2 樋島での「水俣病隠し」

樋島は、認定患者が1人も出ていない島です。

しかし、今思えば、昭和30年代、水俣病が発見されて大問題になったころ、すでに樋島でも、劇症型の水俣病患者が数人はいたのです。手足が激しくふるえてコントロールできない、よだれを垂れ流す、奇声をあげる、そういう悲惨な様子を私も目にしました。

水俣病の原因が魚だと分かり、水俣の漁師は魚が売れなくなりました。そこで、樋島の漁協の幹部は「うちの島からは患者を出さないようにしよう」、つまり、水俣病の存在を隠そう、と決めました。

水俣病患者への差別も始まりました。とくに娘を持つ親にとっては深刻でした。熊本市や県外に嫁に行った娘たちが、「水俣の近くの出身だ」というだけで何人も離縁されて樋島に帰ってきました。私にも昭和29年生まれの娘が一人おります。娘の将来を案じざるを得ませんでした。

島では、水俣病は絶対のタブーになりました。水俣病らしき人はどんどん増えましたが、みんな見て見ぬふりでした。亡くなっても、医者は中風（脳の病気）という診断を下しました。

3 私の症状、母の症状

私にも様々な症状があります。

たしか30代のころ、まず耳鳴りが始まりました。からすまがりも起こすようになりました。年を取って頻繁になりました。手足のしびれと一緒に、安眠できません。これが一番つらいです。夜中、突然、足がひきつります。キューという激痛で、もうどうすることもできません。治まるまでじっと待つだけです。時間にすれば10分弱ですが、この10分弱が本当に長いのです。その後はしばらく眠れません。夜明けまで、1時間半から2時間ごとに、寝たり起きたりを、3回くらい繰り返すのです。

からすまがりやしびれを和らげるために、夏でも厚手の靴下をはいて、手足が冷えないようにしています。手首や足首には唐辛子入りの袋を巻いて寝ます。体中に痛み止めの湿布を貼っています。

手足の感覚がありません。10年前の台風の時、家の屋根が風で飛ばないようにヒモで押さえる作業をしました。終わった後、家に入った私の姿を見た息子が

「親父、どうしたんだ?!」

とビックリした声を上げました。私の上着が血だらけになっていたのです。しか

し、どこから出血したのか、探しても自分で分かりません。すると、また、息子が声を上げました。

「親父、爪が剥げているじゃないか！」

右手の親指の生爪が剥げていたのに、私は痛みをまったく感じなかったのです。

手足を思うように動かせなくなりました。釣りの仕掛けを作れなくなり、舟の上で転ぶなど危険になったので、60歳ころに漁師を引退しました。釣りは好きでしたが、今ではその楽しみも無くなりました。

思えば、私の母も同じでした。何もない平らな場所でよく転んでいました。からすまがりもよく起きていました。晩年はよだれをたらしていました。妻は「母さんは水俣病じゃないか」と言いましたが、私は「そんなことを言うな」と止めていました。

自分に同じ症状が出てきて、初めて母がどれほど大変だったかを知りました。母の苦しみを分かってやれず親不孝をしました。「水俣病隠し」で、見て見ぬふりにした人たちにも本当に申し訳なかったと後悔しています。

4 チッソ、国、熊本県には絶対に責任をとらせる

私が裁判を決意したのは、チッソ、国、熊本県のやりかたが気に入らないからです。

いま天草の沿岸で、掘り起こし大検診の説明をして回っています。「水俣病隠し」の罪滅ぼしです。でも、本当は、50年前に行政が健康調査をやるべきだったのです。平成7年のときは、町の有力な立場の人が、住民には知らせずに、こっそり自分だけ医療手帳をもらっていました。そういうことがばれて、私たち樋島の住民は怒って、裁判にどんどん加わっています。

裁判所には、加害者にきちんと責任を取らせていただくようお願いします。

以 上